

生涯教育専攻 平成21年度卒業論文要旨

本地 駿介

「麻雀と生涯教育 ～ 麻雀で健康に ～ 」

私は今回自分の好きな麻雀のおもしろさ、健康麻雀とはどういったものなのか、麻雀の今後について調べ、述べた。私自身、大学に入ってからずっと麻雀に触れて、麻雀をやり続けてきたのだが、毎回タバコを吸いながら、徹夜で朝までするのが麻雀だという印象が大きかったので、健康麻雀という、賭けない・飲まない・吸わない麻雀は本当に成立しているのか興味が出てきて、今回の卒業論文のテーマにあてた。本稿では、私が麻雀を好きになったのはなぜだったのか、麻雀のおもしろさといったものを考え、麻雀自体の魅力を考えていき、ギャンブルの性質がなくとも麻雀が楽しめるという理由から健康麻雀について調べるとともに、奈良の雀荘で健康麻雀教室を行っている「もくれん」でのインタビュー調査と、健康麻雀教室に実際参加してみたの考察も行った。そして、麻雀と健康麻雀の違いについて考えるとともに、今後生涯学習の分野において麻雀が活躍していけるのか、といったことを調べ、自分の考えを述べている。

(指導担当：岡田)

有地 巧

「生涯スポーツにおける指定管理者制度」

私が今回、卒業論文にこのテーマを選んだのは、「指定管理者制度」という制度は、どういった制度であり、また、制度を導入した際、生涯スポーツの「いつでも、どこでも、誰でもが」という理念は実現されるのか、生涯スポーツにおけるこの制度のメリット・デメリットにはどういった点があるのか、ということについて研究し、考えていきたいと考えたからである。

その結果、この制度を導入し、施設の利用料金を有料とした場合においても、施設の利用料金には上限が定められているため、公共性を保った金額設定は守られ、生涯スポーツの「いつでも、どこでも、誰でもが」という理念は守られると考えられることが明らかとなった。その一方で、この制度は骨組みとしてある制度であるため、地域の環境や財政、更には管理者となる企業によって、その制度の色は変わってくるということも明らかになった。行政が、民間企業をチェックしつつも、支えられるところは支え、民間企業も、公共性ということを尊重しつつ、自分達のノウハウを活用する。こういったことができれば、行政、民間、市民のいずれかにシワ寄せがいき問題が生じるという課題をこの制度は抱えているのである。

しかし、このようにまだいくつか残っている、この制度自体にある課題を克服すれば、行政、民間、市民のいずれにとっても、また生涯スポーツの振興にとっても、良い制度となると考える。

(指導担当：福嶋)

岩原 慶郎

「結婚活動における行政の役割と新たな学習の一面」

「婚活」とは結婚活動を略してつくられた言葉であり、その字の通り結婚を目的として男女が活動することを指す。新聞や雑誌、テレビでも取り上げられ、2008年の流行語大賞にもノミネートされた「婚活」であるが、では今この時代においてなぜ結婚活動が必要になってきたのだろうか？現在、結婚相談所や企業、またインターネットを通じて様々な男女の出会いの場や婚活企画・提供されており、各地方自治体も少子化対策の一環として婚活支援に乗り出してきた。

本研究では、行政が運営している、なら出会いセンターのなら結婚応援団事務局長補佐である高田氏と、長年出会いイベントを行い25組以上のカップルを結婚に導いているレストランアベニールのオーナーシェフ山下氏にインタビューを行い、行政側と主催者側の2つの視点から、取り組む姿勢や思い、また課題や改善点、新たな事業の可能性があるかなどを探り導き出す。

結婚とは繊細で非常に個人的な問題であり、他者が干渉するべきなのかそれは今でもわからない。しかし結婚したくてもできない人たちに、少しでも結婚のチャンスを掴むことのできるこの事業の存在意義はとても大きなものであると感じた。

(指導担当：福嶋)

上田 遼

「考えること」と「行動すること」

自分は小学校のころから14年間ずっとラグビーをしてきた。そして、その中でつくづく思い知らされてきたことが、本テーマである「考えること」と「行動すること」の重要性である。それと似たものを大学にはいつから接した生涯教育のなかにも感じていて、もう少し深く教育とラグビーの経験を結びつけて考えたいと思ったのが、研究の動機である。そこで、卒論では、ジョン・デューイの『経験と教育』を読み、自分のラグビー経験と結びつけて解釈することを試みた。

人と人とのつながりとか、自分の経験を相手に伝えることの難しさや奥深さといった点について、自分は、今までラグビーの世界で感じるものがほとんどであった。そのため、本を読む前はどのぐらい理解できるのか不安な面も正直あったが、デューイのいう「経験」の持つ意味と意外なほど共通していると感じた。現実には関係ないと思っていた学問が身近な問題を捉えるのにとっても大切だということに気付くことができた。そこで、最章では、デューイの考え方を反映させて自分なりに構想したラグビーの練習メニューとその特徴について述べている。

(指導担当：佐々木)

上村 由美

「アルバイト学生の意識と学習」

学生生活において多くの人が経験するアルバイト。戦前は家庭からの仕送りのみでは、学校に行くこと、ましてや食べていくことが困難である学生が「内職」をしていたものであった。それがどうして今日、広まり、当たり前のような感覚になったのであろうか。そして昔の生きるための学生アルバイトと違い、今の学生はどのような意識によってアルバイトをするのであろうか。

本論文では以上のことを、今までのアルバイトに関する論文の文献研究と、天理大学生を対象としたアンケート調査によって、明らかにしていく。さらには結果から大学生の学習とアルバイトの結びつきを調べ、可能性を探り、最終的にはその手段として大学内でアルバイトを提案していきたい。

アルバイトをすることが当たり前になった今日こそ、学生の本業である勉学をおろそかにしてしまいがちではないかと感じたことで、アルバイトに対する問題意識を持った。この研究によって学生とアルバイトの関係を見直していきたい。

(指導担当：岡田)

大木 健奨

「生涯スポーツ社会における理想的なチームマネジメント」

私は、卒業論文のテーマとして、大学 4 年間で学習してきた「生涯教育」の観点から、理想的なスポーツ指導者、スポーツチームの運営について、大人のスポーツチームと子供のスポーツチームの違いについて考える事にした。そして、自らの経験、先行研究や指導者へインタビュー調査をする中で、子供と大人のチームマネジメントの違いや、大人と子供のどちらであっても「マネジメントする側が絶対にブレない事」「チーム全員が納得して活動できるようなルールを決めておく事が大切である。」という事の大切さもわかった。又、固い組織とゆるい組織では、マネジメント方法は異なり、固い組織には、課題重視型のリーダー、ゆるい組織には、人間関係重視型のリーダーが最適である。私の最終的な結論は、「理想的なチームマネジメント」とは、各チームがコンセプトとしているものによって、リーダータイプを決定し、その活動の中で生まれるものである。

(指導担当：福嶋)

大口 遥

「公共図書館における居場所空間の形成」

現在の公共図書館の機能に付け加え、自分の居場所となる滞在型図書館をつくるにはどうすれば良いか考えた。先行研究では、現在の図書館像が立ち寄り型から目的施設へと変貌してきていることが示されていた。その他、人々が自分の居場所を求めていたり、図書館を癒し・回復の場と捉えている事などから、滞在型図書館の必要性が研究結果から述べられていた。

そこで、滞在型図書館としての取り組みを行っている、東近江市立八日市図書館の職員にインタビューを行った。その結果、図書館の空間づくりや居場所づくり、資料費・本の確保、専門司書の確保が滞在型図書館を取り組む上での必要条件であることがわかった。また、他の図書館はなぜ滞在型図書館化をすすめることができないのか、東近江市立図書館以外の大淀町立図書館・橿原市立図書館とを比較した。その結果、滞在型を目指す上で予算の問題と館長・職員の問題・図書館の空間づくりの課題が浮かび上がった。

(指導担当：福嶋)

片田 真平

「大学生のファッションについての考察～天理大学生のインタビュー調査をもとに～」

大学という環境は、それまで通っていた環境とは異なり、授業や単位など、大きく生活スタイルが変化する。その中でも、大学において私服で生活することに着目し、天理大学生のファッションについての興味関心について研究した。

第一章では、私服とはどのようなものか、本研究で扱う私服の意味合いについて述べ、制服から私服の変化について説明している。第二章では、先行研究の結果から、本研究の調査課題を設定している。第三章では、第一節と第二節に分け、第一節では研究方法をインタビュー調査にした理由、第二節では天理大学生を対象にしたインタビュー調査を質問の項目ごとにかけて分析している。

インタビュー調査の結果から考察では、天理大学へ入学してより強くファッションに興味を持ったという結果になり、天理大学にしか見られない私服の風潮があることを発見できた。また、ファッションへの興味をもつようになるのは、同じ学生からの影響が強いことがわかった。

本研究を通して、天理大学生が持つファッションへの興味関心について、インタビュー調査を実施した人数分の視点からファッションについて調査できた。

(指導担当：石飛)

加見 大地

「ストリートダンスをめぐる若者と大人の意識」

今日、駅周辺等「ストリート」で踊っている若者が増加した。そのような中で、若者に視点を当てている論文はあるが、それを取り巻く周りの大人達に着目している研究はない。この点について感心を持ったのが本研究をするに至った動機である。若者側は多様な考えを持っている。それに対する大人たちは、若者(ダンサー)に対して「道端でたむろ」、「チャラチャラ」等、良くない印象を持っているだろう。しかし研究を行うに連れ、意外な結果が見えてきた。

本研究では、3つの駅周辺で、ストリートダンサーに対する一般向けのアンケートを実施した。その結果をもとに、一般の人の考えをダンサー側にぶつけるアンケートを行った。それによると、意外にも周りの大人たちが抱くダンサーの印象が良く、練習場所に対しても肯定的であった。だが一方で、自分達の生活区域でダンスをすることを快く思わない否定的な気持ちが混ざっていた。これに対し、ダンサーのほとんどが「理解されたいが、自分達の活動に口出しされるのはしょうがない」と思っている。大人たちは、ストリートダンスをただかっこよくて支持するのではなく、若者の想いにも耳を傾ける必要がある。ダンサーが今よりもっとストリートで練習をしやすい環境に、そして大人たちがダンサーに対しての印象をもっと良くするために、お互いの相互理解が進むことが望ましい。

(指導担当：佐々木)

岸 直行

「児童虐待解決と防止に向けての援助」

今回、私が取り上げた「児童虐待」というテーマは最近ニュース等で事件として取り上げられている。昨年、教育実習の際に「児童虐待」というテーマに触れ、この問題について研究したいと思い、論文のテーマにした。

はじめに、今までの歴史の中で起こった「児童虐待」の背景を調べることによって、現代の「児童虐待」の問題追求の糸口になるのではないかと考えた。また経済不安・国の情勢の面からは今と昔の変化を通して「児童虐待」のパターンがどのように変わっていったのかを考えてみたいと思った。

一方、現代の「児童虐待」のパターンの中から経済的不安以外に子育てで悩む母親の状況を把握するために市役所の児童課を訪れ、様々な問題で「児童虐待」に至ってしまった理由、児童課に相談に来られる内容や、また市役所で抱える問題を伺い、今後の児童虐待の防止につながる手がかりを探りたいと考えた。

こうした調査や講演会への参加経験から、地域社会が児童虐待に関心を示し、子どもを地域で守っていこうという風潮が高まることが児童虐待の防止につながるのではないかとということが確かめられた。

(指導担当：福岡)

佐古 慎人

「社会貢献活動が生み出すサラリーマンの意識に関する考察」

本研究では、サラリーマンの意識に関して社会貢献活動・ボランティア活動と本業の関連性という側面に焦点をあてて考察した。研究にあたっては、大きく 3 つの柱をたてた。第一に先行研究・調査の詳細なレビューである。第二は、社会貢献活動に取り組むサラリーマンの具体的な意識を分析するために、ある企業の男女計 6 名に対してインタビュー及びアンケート調査を行うことである。第三は社会貢献活動を促進するための企業のあり方に関する企業論をもとにした考察である。

社会貢献活動は、それに取り組む本人の自発性を基本とする。同時に企業が活動に取り組む社員たちの姿勢を習慣づけるような仕掛けを行うことで、活動に取り組んだ者は社会貢献の本質を感じる。それにより自分の仕事が人々に役立っていると感じ、企業を誇りに思うようになる。こうした全体的な枠組みが重要である。調査結果からは、社会貢献活動は楽しいものであり、どれだけ意識を高くもって取り組むかによって自分にはね返ってくるものが違うと感じているサラリーマンの意識がみえてきた。企業論の視点から言うと、企業において最も重要なものが人間組織であり、社員と社員の繋がりである。本調査対象からも、上司による社会貢献活動への誘いや同じ社員同士で参加を促す例がある。また、業務から離れたところでの人々の交流による社員一人一人の意識の変化が結果的に企業全体を突き動かす力となっていたことが考察できた。

(指導担当：佐々木)

佐々木 一喜

「生きがいと宗教の関わりについて ～ 天理教を事例として ～ 」

人間がよりよく生きていくためには、生きがいを持って生活していくことがとても大切である。神谷は生きがいと宗教に関係性があることを主張しているが、もし宗教が人間に生きがいを与える役割を持っているのなら、宗教の持つ役割は大きなものであると思う。そこで本研究では、自分の身近な宗教である天理教を事例として、信仰者が生きがいを持って生活しているのかを調査し、宗教が人間の生きがいにどのように関わっているのかを研究した。

調査結果から、天理教の信仰と生きがいに関連していることがわかった。宗教の本質的な役割は人に生きがいを与えるものであると考えられる。宗教を信仰する中で、生きる意味や、使命などといった積極的なものを見いだすことができたならば、宗教は、苦しみを癒すという消極的な意味ではなく、生きる意味をもたらす、積極的な生きがいを与えるものになるのである。またこのような積極的な生きがいを見つけるためには、信仰を求める努力が必要であると思う。自らが信仰を求めている中で、少しずつ自分の生きがいと呼べるものが見つかってくるのではないだろうか。それは、信仰者だけでなく、信仰のない人でも、生きがいを見つけるためには、そのための努力が必要であると思う。

(指導担当：岡田)

白髪 友里

「天理大学生の天理教信者と未信者の幸福感に関する一考察」

私は普段学生生活を過ごす中で、天理教信者の友人は未信者の友人よりも他者への献身に幸せを感じているようだと感じた。そこで本研究では、天理大学生を対象にアンケートを行い、実際に天理大学生の天理教信者は未信者より他者への献身によって幸せを感じているのかを調べ、さらに宗教態度と幸福感の関係性を調査し、大学生にとって宗教が果たす役割、意味を考察した。

アンケートの結果、天理教信者は未信者より幸福感が高く他者への献身に、より幸福感を感じているという結果が得られた。しかし、信仰態度での差が大きく、不幸福感の調査では天理教信者の方が不幸福感が低いという傾向がみられないことが確かめられた。これらの結果は宗教態度と幸福感の関連を考える上での本研究の成果であるといえる。

天理教は「陽気ぐらし」を目標に世界たすけを目指す宗教であるため、天理教の教えはとてもポジティブな教えである。人間は誰もが幸福でありたいと願う。大学生にとって信仰するという事は、幸福感を感じながら生活する為のヒントのような役割があるのではないだろうか。

(指導担当：福嶋)

當山 優

「高齢者の学習活動に関する研究」

本研究の動機は、「高齢者の学習活動」についての具体的な中身、また、学習者自身が学習に対してどのような思いを持っているのか（喜びや悩みを感じているのか）について知りたいと思ったからである。卒論のためのデータ収集としては、「まほろばシニアリーダーカレッジ」という高齢者大学の参加者と地域づくりに取り組む「柳本もてなしのまちづくり会」の会員を対象に調査をおこない、筆者も実際の活動場面に参加して当事者の声を聴いた。前者は講座で学ぶ学習者、後者は日常活動において特に「学習」という意識を持っていない集団であるという特徴がある。

調査の分析からわかったことは、一般的な「学び」を知識の習得やスキルアップを目的とするものと考えれば、高齢者の活動はそれとは異なる実態があったということである。誤解を恐れずに言えば、「学習することを主目的」としていないとみることができ、社会貢献など自分の持っているスキルを社会に還元したいと感じている方も少なくなかった。「まほろばシニアリーダーカレッジ」では、人間関係の摩擦が生じても高齢者特有の経験によって相互理解を進めようとする点が印象に残った。「柳本もてなしのまちづくり会」では、悩みを貯め込まず自由に発言する事、不平を言ったり足の引っ張り合いはしないとといった参加者の心がけが活発な点が活動の基礎にあると考えられる。

(指導担当：佐々木)

中村 真之介

「コーチング ～スポーツが行われる場から～」

スポーツ競技経験の豊富な体育教師や指導者が、現役時代に身につけた技術や知識を、他の選手に「教え込む」ことが期待されているコーチング。自分が受けたスポーツコーチングをきっかけに、スポーツコーチングに興味を持ったことが研究の動機である。コーチングの意味が「教え込む」とされ、「指導」と何が違うのか疑問に考えた。本研究では、コーチングについて述べ、問題点について考える。従来からのコーチングに問題点があるために、新しい要素を取り入れたコーチングへ発展したと考える。教育現場で行われるコーチング事例から、私が今まで出会った指導者の方々にインタビュー調査を行う。指導者のそれぞれの想いや意図があることから、「指導」と「教え込む」の違いは選手自身の変化にあった。今後、コーチングを受けた人間が、指導者になって、今後どのようにコーチングを展開していくのかに面白みがあると思う。

(指導担当：岡田)

中村 めぐみ

「大学生をつくるもの -大学生活に関する意識調査から-」

大学生にとって4年間の大学生活はどのようなものであるだろうか。私にとって大学生活は専門の知識を学ぶだけでなく、教養を身に付けたり、クラブやサークルに打ち込んだり、アルバイトをしたり、さまざまな人との関わりによって自分を成長させる場であると考え。そこで本研究では、本学の学生がどのような学生生活を送っているのか、その実態と意識について調査を行い、勉学と課外活動の関連や本学学生の特徴を他大学と比較しながら分析することとした。

アンケート結果は「大学入学満足度」と「大学生を成長させるもの」に焦点をあて、分析を行った。その結果、満足度と成長は関係していることが分かり、天理大学生の特徴として「信じている宗教を信仰すること」や「人に喜んでもらうことで自分も喜びを得る」と回答した人の満足度も成長度も高いことが分かった。

考察の結果、「大学生をつくるもの」は大学生をとりまく環境であると考え。中でも友達をはじめ、先輩後輩、学校の先生、アルバイト先の人、恋人などの周囲の人々との関わりによって大きな影響を受けていることが分かった。

(指導担当：石飛)

藤多 智昭

「飛込競技を活性化させるために」

私は14年間飛び込み競技を続けてきた。競技人口、競技の人気、認知度がこの競技は多くない。アンケート、インタビューを飛び込み関係者から取り、研究した。そういった中、どのようにこれらの問題を解決し、生涯スポーツの一つとしていけるかを考察した。

1章では、飛び込み競技や歴史について説明した。

2章では、クラブ経営について調べた。

3章では、競技を普及させたスポーツを調べ、飛び込み競技と比較した。

4章では、競技の現状を知るためにアンケート、インタビューを行い、問題点を指摘した。

5章では、生涯スポーツの視点から、飛び込み競技を考察した。

水泳協会やクラブの取り組みもそうだが、活性化には地域の取り組みも大切であると思うようになった。

(指導担当：石飛)

前田 有弥

「生涯教育と空手道」

私は保育園から空手道を習っており、これからも一生続けていきたいと考えている。本研究では、私が今まで経験してきた「空手道」と天理大学で学んだ「生涯教育」を結びつける。財団法人「全日本空手道連盟」の組織は、地域団体である各都道府県連盟および地区協議会、競技団体である中学校・高校・大学・実業団の各連盟、そして各流派からなる会派団体から構成され、これらの団体の集合体として国内空手界を一つにまとめている。

空手道と生涯教育を結びつけるのに私の地元（姫路市）の道場（拳心館姫路広畑支部）が行っている「スポーツクラブ21」という事業に注目した。スポーツクラブ21とは、子供から高齢者、障害のある方、トップアスリートまでの全ての人々が、それぞれの価値観・技術レベルに応じてスポーツに親しみ、健康づくりができるという地域型スポーツクラブである。

空手道しかやっていた私にとって、今までとは違ったことを発見し、「生涯スポーツ」という幅広い視野から「空手道」を見ることができた。今後、道場生を指導するにあたってこの論文で学んだことを生かしていきたいと考えている。

(指導担当：岡田)

松久 貴郎

「現代若者の『伝統文化』の受容に関する意識 ―天理大学雅楽部の活動を中心に―

本研究では天理大学雅楽部の学生活動を通して、現代の学生がどのような意識のもと「伝統文化」に取り組んでいるのかについてアンケート・インタビューを行い、雅楽の歴史、その特異性そして雅楽部の歴史に触れながら研究を行った。研究を進めていく中で特に、その取り組みにおいて部員と「雅楽」との距離感という点から考察を行うことができた。そのなかで見えてきたことは、雅楽部員の「成長」において大きく「経験」ということが関係しているということである。即ち1回生から4回生までの取り組みを縦の線で分析し考察していくと、上の学年になるにつれて学生と「雅楽」との関係性がより近くなっているということがわかった。また、雅楽の歴史と比較して考察すると、その成長過程にも特徴的な事柄がうかがえた。それは練習や技術の向上の過程において学生に「技術を盗む」という意識が芽生えているということである。元来、雅楽はその歴史において楽家のなかで世襲制度によって伝承されていたものである。また、雅楽には譜面にのっていない微妙なニュアンスの奏法が多くあり、楽家によって演奏方法も異なる。そのため古くから「口伝」という形で伝承されてきた。こういった背景をもつ雅楽に課外活動の一つとして楽家や世襲といった束縛のない大学生が取り組むことで、より広い見地からの取り組みが可能となるとともに、「考える」という行為がより内面化し「技術を盗む」といった意識も芽生えてくるのだろう。その意味で雅楽という「伝統文化」に現代の若者である大学生が取り組むということは、雅楽の世界においても学生自身においても、大きな意味をなすといえよう。

(指導担当：佐々木)

光岡 美里

「デス・エデュケーションと宗教性の関係

～ 天理大学生の天理教信者と未信者を対象に ～

私たち人間は、死と隣合わせで生きているからこそ、死の意味を考え、生き方を学ぶ教育が年齢に関わらず重要である。日本でデス・エデュケーションが注目され始めたのは1990年代で、わが国で「死への準備教育」と訳されたのはアルフォンス・デーケンが最初である。アルフォンス・デーケンは、人間として完成して死ぬことを人生の最終的な理想と位置づけており、そのための死の準備であり、特定の宗教とは関係ないという。本当に特定の宗教とは関係がないのだろうか。そこで、天理大学生を対象にデス・エデュケーションと宗教性の関係を調査した。その結果、天理教の信者、未信者で違いはでた。

学校教育に取り入れるだとか、天理教の様な考えをして生きるといったことはそう簡単にはできない。身近にできるデス・エデュケーション、それは毎日を心から笑顔で笑っていることだと私は考える。それだけでも最期にはいい人生だったなと思えるはずである。

(指導担当：石飛)

宮本 知明

「ボーイスカウトの教育法に関する研究 — パトロール・システムの意義 — 」

1907年にイギリス帝国の軍人であったロバート・スティーブンソン・スミス・パウエルによって創設されたボーイスカウト運動は、2009年には正加盟国160カ国、正加盟員2,500万人を数える世界的な青少年教育運動となっている。

ボーイスカウト運動の特徴として、創始者は「パトロール・システムは、スカウト訓練が他のあらゆる組織の訓練とは異なる点で唯一の、そして不可欠な特徴である。」と述べている。少人数の青少年が班（パトロール）をつくり自主的に活動し、成人は間接的に関わるのみという手法は当時の英国社会において画期的な教育法であり、現在もボーイスカウト運動の教育法の基本として考えられている。

現在のボーイスカウト課程において加盟員の減少などにより、班活動における少年の持つ責任や役割は軽減、分散される傾向にある。ボーイスカウト運動の特徴である、青少年による自治性をどのように維持していくのか、今後研究が尽くされる必要があるだろう。

(指導担当：岡田)

山口 勝巳

「障害者スポーツの身体障害者野球についての研究」

私はずっと、障害を持つ人には野球はできないと思っていた。しかし、高校のときに、障害者野球を生で見て、素直に感動して、障害者が野球をすることに、すごく興味を持った。そして私は、野球をしている障害者の人が、野球に対しての思い、野球を始めてからどのように考えが変わったか、知りたかったので、研究した。

第一章では、障害者野球について、詳しく知ってもらいたくて、障害者野球がどのように運営されているか、身体障害者野球の概要や、加盟チーム、公式ルールなどについて述べた。

第二章では、障害者野球チームにお話を聞かせて頂き、どんな練習をしているのかなど、直接見てみたかったので、見学させて頂きに行った。私の地元である奈良県に障害者野球チームがあり、チームの歴史、構成、障害者野球の形など、詳しく聞かせて頂いた。

最後に、私は、障害者が野球をやることに、すごく感動した。そして、あらためて、野球ができる有難味を味わわせてくれた。障害者野球を知ることができて、よかったと思う。

(指導担当：石飛)

大和 剛士

「第一印象の重要性 ～ 人の印象はどのようにして決まるのか ～ 」

本研究は、第一印象の重要性、人の印象形成について顔という身体の一部を取り上げ、印象はどのようにして決まるのか研究したものである。第1章では、顔の形や部分が性格と大きな関連性があり、人は見た目である程度判断されるということを述べている。第2・3章では、心理学的視点から述べており、第2章では印象形成について、第3章では人それぞれが持つパターンや、先入観といった暗黙の性格理論、ステレオタイプについて述べている。第4章では、第一印象についての調査及び調査結果を述べている。調査方法は男女の顔写真を見せ、項目ごとに顔写真を選んでもらい、またその理由も述べてもらうという実験的アンケートを行った。第5章では、第4章の調査をもとに考察し、述べている。

本研究結果より、第一印象で特に影響を及ぼすものは目であるが、自分の個性を自由に現すことのできる髪型や眉毛といった部分の影響も印象に深く関係していることが言える。また、男女において人の見方に違いが見られ、同性を見る場合、異性を見る場合と男女では人の判断基準、特性というものが違うことが明らかとなった。

(指導担当：石飛)

山本 紫保

「ガブリエル・シャネルの『学び』と『成長』」

本研究では世界的なブランド「シャネル」の創始者であるガブリエル・シャネル (Gabrielle Chanel:1833-1971) の伝記を検討し、企業家として成功を収めた彼女の人生を「学び」としては特に人間関係に着目し、エチエンヌ・バルサンやアーサー・カペル、ウェストミンスター公ら上流階級の者たちとの恋愛、また、ミシア・セールとの友情関係、それをきっかけに広がった一流の芸術家たちとの交遊等について詳述した。

シャネルの生涯を通じて分かることは、経験を積み重ねることによる彼女の成長過程である。経験の中には、例えば香水「シャネル5番」の発売など、一般的によく知られる企業・ブランドとしての成功だけでなく、貧しい幼少期における孤児院での暮らし、恋人たちとの死別や恋愛関係の破綻、あるいは第二次世界大戦中からの社会的な圧力等、さまざまなマイナス要因も含まれる。論文中には人間関係のなかでシャネルが学んだことを具体的に整理したが、そこから、シャネルの成長には、経験のなかで培ったバイタリテイをもとに、マイナスをプラスに変える力が大きく影響していたのではないかと考察した。

(指導担当：佐々木)

山下 恵子

「団塊世代の専業主婦の活路」

団塊の世代とは、昭和22～24年に生まれた人たちのことである。現人口約680万人、総人口の5%を占めている。堺屋太一氏によって名付けられ“ひとかたまり”を否応なしに認識させられた団塊の世代は、その人数の多さゆえにともすれば、社会のお荷物や諸悪の根源であるかのように揶揄され疎まれがちであるが、ただ疎まれるだけの“塊”で終わらないためにも、個々に自立した人としての生き方の質を高める必要がある。

そこで本論文では、かつて筆者が学んだ某短大の同窓生の生きざまを事例として、団塊世代の専業主婦にスポットを当て、敗戦という稀にみる苦痛を味わった親たちから生まれた“塊”が社会の移り変わりをどのように生きてきたのかを検証した。それを通して今日の社会の変化に呼応しつつ、迫り来る老後を中心に豊かに生き抜くための示唆となりうるものは何かを〔生涯学習〕と〔老後の展望〕の二面から考察を試みた。

(指導担当：岡田)